

2021年前半の経済、世界は大幅上方修正、日本は停滞

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト 土田 浩

OECD 世界経済見通しが改訂された。世界全体の實質 GDP 成長率は、2020 年▲3.5%の後、21 年は+5.8%。半年前の予測では、21 年はコロナ前の水準(19 年)に丁度戻る姿だったのが、この半年間で様変わりの急加速である。

地域別にみると、中国が、20 年にプラスを維持したうえで、21 年は+8.5%の高成長。米国も、大規模な財政刺激策もあって、半年前には想像し得なかった+6.9%の急拡大である。これに対して日本は、昨年の落ち込みの半分程しか戻らない。年初来のコロナ感染再拡大やワクチン普及の遅れが影響している面は、確かにある。

しかしながら、もう少しロングスパンで、20～22 年の 3 年間合計の成長率にも着目してもらいたい。世界が昨年のコロナショックを乗り越えて、+6.7%の成長と見込まれているのに対し、日本は漸くコロナ前の水準に届くかどうかという停滞ぶりである。

これをどう解釈すべきだろうか？ 勿論、人口減少問題に直面し潜在成長力の低い日本に、中国や米国のような高成長は望むべくもない。ただ、コロナ被害が深刻だった EU 諸国が、その後しっかりした足取りで回復を遂げる姿と比較しても、かなり見劣りしている点は見逃せない。

一般に、世の中の激動期・変革期には、没落する勢力が幅広くみられる一方で、チャンスと捉えて目敏く立ち回る者も大勢現れる。いま世界で起きている動きを仄聞するにつけ、そのうねりの巨大さ、迅速さに驚きを感じる。

それは、半導体などの DX 分野にとどまらない。金属、エネルギー、食料などの広範な一次産品で需要が拡大

し、価格が急上昇している。積極的な動きは企業部門だけではない。米国では住宅建設が爆発的に増加し、“ウッドショック”と呼ばれるほどに世界の木材価格が高騰している。

こうした世界経済の拡大は、日本にも大いに恩恵をもたらしている。得意とする半導体製造装置を筆頭に、輸出の増加が国内需要の落ち込みを下支えしている。しかしながら、その一方で、内需型企業にとっては、為替円安傾向とも相まって、原燃料価格の高騰という形で収益の圧迫要因になり始めており、先行き注意が必要だ。

世界が活発に急展開する中で、日本のコロナ対策は、これまでのところ籠城作戦である。人流を抑えて嵐が過ぎ去るまで耐え忍ぶという“緊急事態宣言”が象徴的だ。政権交代や連立政党交代が毎回起こる欧米諸国とは違って、長期安定政権を誇る日本は、本来、小手先の点数稼ぎなどせずに、将来を見越した一貫した政策を大胆に実行可能な筈なのに、どうしたことだろうか？

基本動作の徹底以外に訴えるものがなく、根拠なき精神論を繰り返す指導者層。ルーティン化した報道に終始し、実務レベルの不備にばかり目くじらを立てるマスコミ。それらを見て無力感を覚える国民。危機の時代にも拘らず、国家戦略の議論が一向に盛り上がらない日本には、閉塞感が漂う。

言うまでもなく、コロナ対策は経済面のみでは論じられない。とは言え、世界経済が急加速する中で、このままでは日本だけが停滞するという認識は、忘れずにいたい。

■ OECD 世界経済見通し (2021 年 6 月)

(カッコ内は 2020 年 12 月見通しからの変化幅 単位: %、%ポイント)

	2020 年		2021 年		2022 年		2020~2022 年計	
世 界	▲3.5	(+0.7)	+5.8	(+1.6)	+4.4	(+0.7)	+6.7	(+3.0)
米 国	▲3.5	(+0.2)	+6.9	(+3.7)	+3.6	(+0.1)	+7.0	(+4.0)
中 国	+2.3	(+0.5)	+8.5	(+0.5)	+5.8	(+0.9)	+16.6	(+1.9)
E U	▲6.7	(+0.8)	+4.3	(+0.7)	+4.4	(+1.1)	+2.0	(+2.6)
日 本	▲4.7	(+0.6)	+2.6	(+0.3)	+2.0	(+0.5)	▲0.1	(+1.4)